黎明館屋外展示の「樋の間二つ家」
―旧海老ヶ迫家住宅の解体・移築・復元の概要―

小　野　恭　一

はじめに

鹿児島県歴史・美術センター黎明館（以下，黎明館）の屋外展示場にある茅葺き屋根の古民家は，霧島市横川町下ノ（旧姶良郡横川町）の海老ヶ迫家住宅を昭和57～58（1982～1983）年に移築・復元したものである（以下，旧海老ヶ迫家住宅）。

旧海老ヶ迫家住宅は，フタツエまたはフタツゼ，イエ・ナカエなどと呼ばれる南九州の二棟造り（分棟型・別棟型）の民家である。そして，「おもて」（居間・客間となる棟）と「なかえ」（炊事・食事をする棟）を近接して建て，二棟の屋根の谷間に樋を通し，その下に板を敷いて二棟を往き来できる廊下状の「てのま」（樋の間）を設けている点に特徴がある[1]。南九州の民家の系譜をまとめた民俗学者の小野重朗氏は，このような形式の民家を，「樋の間二つ家（てまふたえ）」と呼んだ[2]。

小野氏は，沖縄・奄美の南西諸島や下甑島などに見られる「おもて」と「なかえ」が独立して建つ「離れ二つ家」の形式を分棟式民家の原形と捉え，このような民家が一棟の「一つ家」へと発展する過程で，「おもて」と「なかえ」の二棟が接近して二棟の屋根の端が接着していくものと理解する。

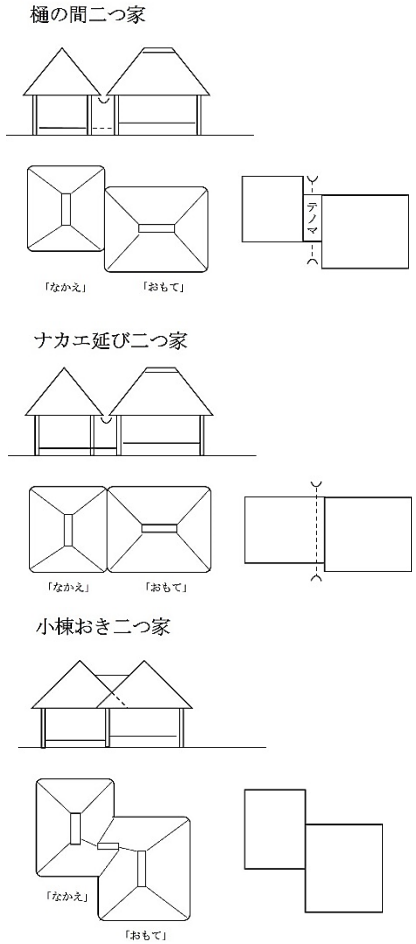
屋根が接着した段階において，二棟の屋根の谷間に雨水を流す樋を渡すが，この樋の下に廊下状の「てのま」を設けた構造のものが「樋の間二つ家」である。

また，樋はあるが「てのま」を設けず，「なかえ」側の床を「おもて」側まで延ばした構造のものが「ナカエ延び二つ家」である。「ナカエ延び二つ家」は，外見上は「樋の間二つ家」と違いが見られないが，「おもて」側の床組と軸組に合わせて「なかえ」をつくる構造上の特徴が見られる。

さらに「おもて」と「なかえ」の合着を進めた形式が「小棟おき二つ家」である。「小棟おき二つ家」は，「おもて」を「なかえ」よりも前方に寄せて両棟を連結させ，二つの屋根の間にできる谷部分の上に小さな棟（小棟）を設けて屋根の重なりを処理する構造となっている。

構造上の特徴から言えば，「樋の間二つ家」は屋根接着型，「ナカエ延び二つ家」は部屋接着型，「小棟おき二つ家」は棟連結型となる。

図１　南九州の分棟型民家[3]



「樋の間二つ家」は，旧薩摩藩領内に広く見られ，「ナカエ延び二つ家」は，薩摩半島，特に南九州市の旧川辺郡知覧町・川辺町，日置市の旧日置郡金峰町・吹上町の辺りを中心に色濃く分布し，「樋の間二つ家」に交じって北薩・姶良，宮崎県南部にも少数ながら点在する。また，「小棟おき二つ家」は南九州市知覧町の地域に限って見られることから，小野氏は，「ナカエ延び二つ家」と「小棟おき二つ家」は，知覧の大工が工夫改良をする中で発生した民家の形式と捉える。

以上のように南九州の二棟造りの民家を見ていくと，「樋の間二つ家」は，二棟造りの民家が一棟の民

家に合体していく発展過程において，原初的な段階にあり，南九州の典型的な民家の形式と理解できる。

さて，旧海老ヶ迫家住宅は，移築前の昭和47年度に鹿児島県教育委員会が文化庁の指導と補助を受けて実施した緊急民家調査において，特に資料的価値の高いと考えられる民家として第３次調査の対象となった実績があり，『鹿児島県の民家―鹿児島県緊急民家調査報告書―』に，その調査記録が紹介されている。

その後，明治百年記念館（現・黎明館）の建設準備に際して，寄贈の申し出があった。住宅の保存状態が良く，また資料的な価値も高いと判断されたことから，現在の黎明館の敷地内（鹿児島市城山町）に移築・復元されることになった。

鹿児島県の委託を受けて鹿島・小牧・新生建設共同企業体が工事を行い，鹿児島大学工学部教授の伊藤行氏（建築学），明治百年記念館建設調査室専門委員の小野重朗氏（民俗学）の評価と助言を得て，解体時には建築技法や建物の状況についての詳細な調査を行った。そして，民家の復元後，解体・移築・復元の記録をまとめた工事報告書『てのま型二つ家移築の記録』（以下『記録』と略称。）(4)及び５本の８ミリフィルム（解体工事２本，復元工事３本）が提出された。

しかし，これらの報告書等は公開されてこなかったため，旧海老ヶ迫家住宅の解体時の知見が知られることなく，その資料的価値や位置付けが不十分なままとなっていた。

そこで，本稿は，旧海老ヶ迫家住宅の移築・復元から 40 年を経過する節目に，関係機関に了解を得て，工事報告書を要約し，黎明館に残された図面や写真等の資料をもとに，旧海老ヶ迫家住宅の解体・移築・復元の概要について紹介するものである(5)。

１　建物と工事の概要

（１）建物の概要

海老ヶ迫家は，横川郷の郷士の家柄で，近在の岩屋観音の守人と伝えられている(6)。

旧海老ヶ迫家住宅の建築年代は，天保年間（1830～1844年）頃と推定されているが，棟札など明確な根拠となる資料は見つかっていない(7)。そして，昭和 50 年代前半まで海老ヶ迫砂雄氏が居住していたものである。

移築前の建物は，東西棟の「おもて」と南北棟の「なかえ」が直角に接し，南側に前面を揃えられている。そして，「おもて」と「なかえ」の間に樋が通され，その部分が「てのま」となっている。

建築面積は，112.36 ㎡（34.0 坪）で，「おもて」のカミオモテ（一ノ表）とオモテ（二ノ表，スエ），及び「てのま」の北側に，ナカンマとナンド，イタノマ（板間）が増築され，増築部分には瓦葺きの庇を下ろしている。増築年代は定かではないが，増築面積は 19.87 ㎡（6.0 坪）である。

また，オモテ（二ノ表）の西側のイタノマ（板間）の上に押入を作る改造がある他，戸棚や窓などの細部に変更があるものの建築当初の構造をよく保っている。図２参照。

復元時の建築面積は 92.49 ㎡（28.0 坪）で，原則として創建当初の姿に復元すべく，増築部分と補修部分を除去した。また，オモテ（二ノ表）に囲炉裏を復元し，カマドは当時の生活様式にならって土間の中央に設けた。図３・図４参照。

復元時の仕上げについては，以下の仕様とした。

屋根は，新設茅葺き，下地竹とする。

木材は，原則として既設を再使用するが，根太大引及びタタミ下竹組は新設とする。外壁板材は全て新設とする（杉板，厚さ 18 ㎜目板貼）。

塗装は，外壁材の外部面はバーナー焼の上，ペーパー仕上げとし，他柱，敷居等は全て柿渋塗とする。

礎石は既設を再使用する。

井戸は，既設井戸を移築する（ＧＬより上のみ，H=1,000 ㎜）。

室内仕上表　（『記録』６頁，一部改）

室名	床	壁	天井	備考
土間	粘土突固め ニガリ入り	杉板柿渋塗㋐18 ㎜	梁あらわし	木製流し，味噌壺台
ナカエ	タタミ敷込（下地丸竹組）㋐54 ㎜	同上	同上（一部丸竹あらわし）	囲炉裏（カマ上仕上）
板間，樋の間 ナンド	既設にならう	同上	同上	納戸のみ ヨロイ戸
二ノ表	タタミ敷込（下地丸竹組）㋐54 ㎜	同上	同上（丸竹敷並べ）	囲炉裏
一ノ表	タタミ敷込（下地丸竹組）	同上	既設天井板再使用	床ノ間，脇床，神棚
ヌレ縁	既設床板再使用	同上	同上	

茅はえびの市柚木正照氏に依頼して準備したもの，麦藁は海老ヶ迫家に保管してあるものを使用する。

なお，茅の刈り取りは 12 月から１月に行い，乾燥したものを使用する。

屋根葺き職人は，横川町の人に依頼する。

図２　平面図（移築前）　（『記録』３頁）

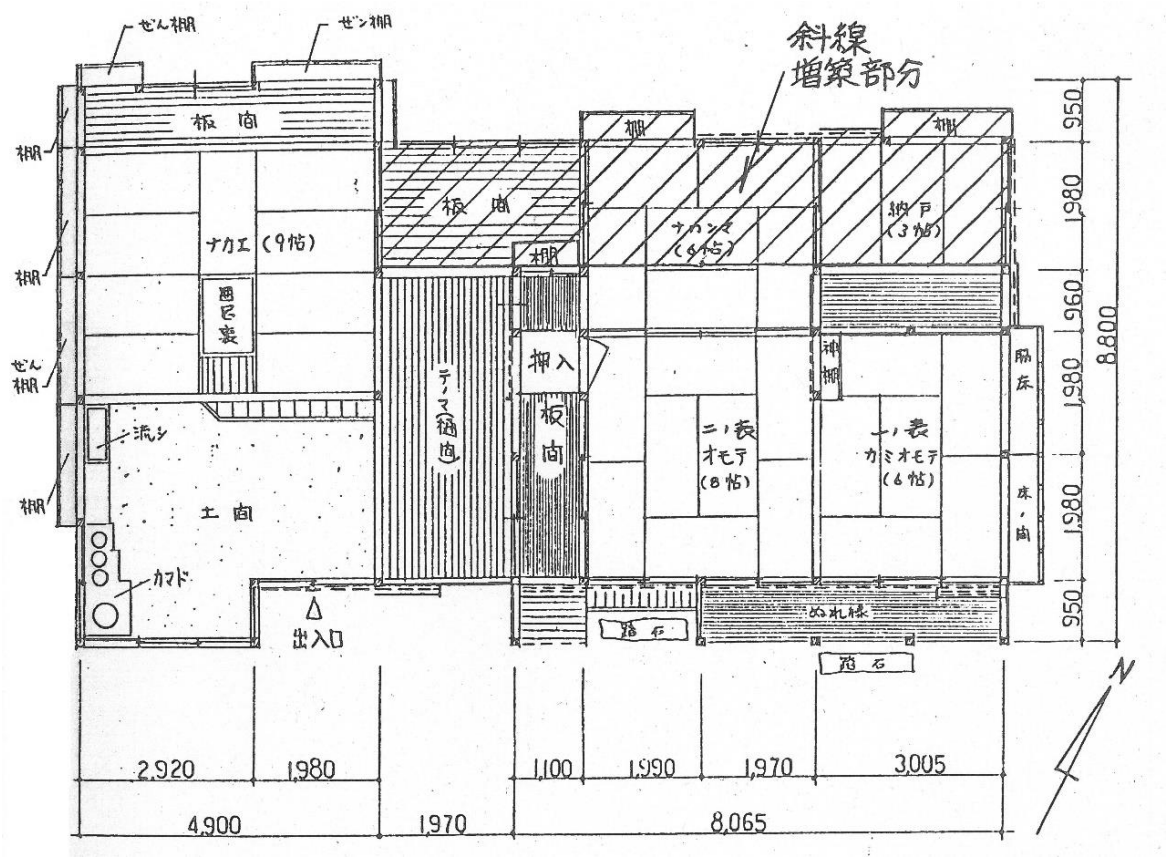


図３　平面図（復元後）　（『記録』４頁）

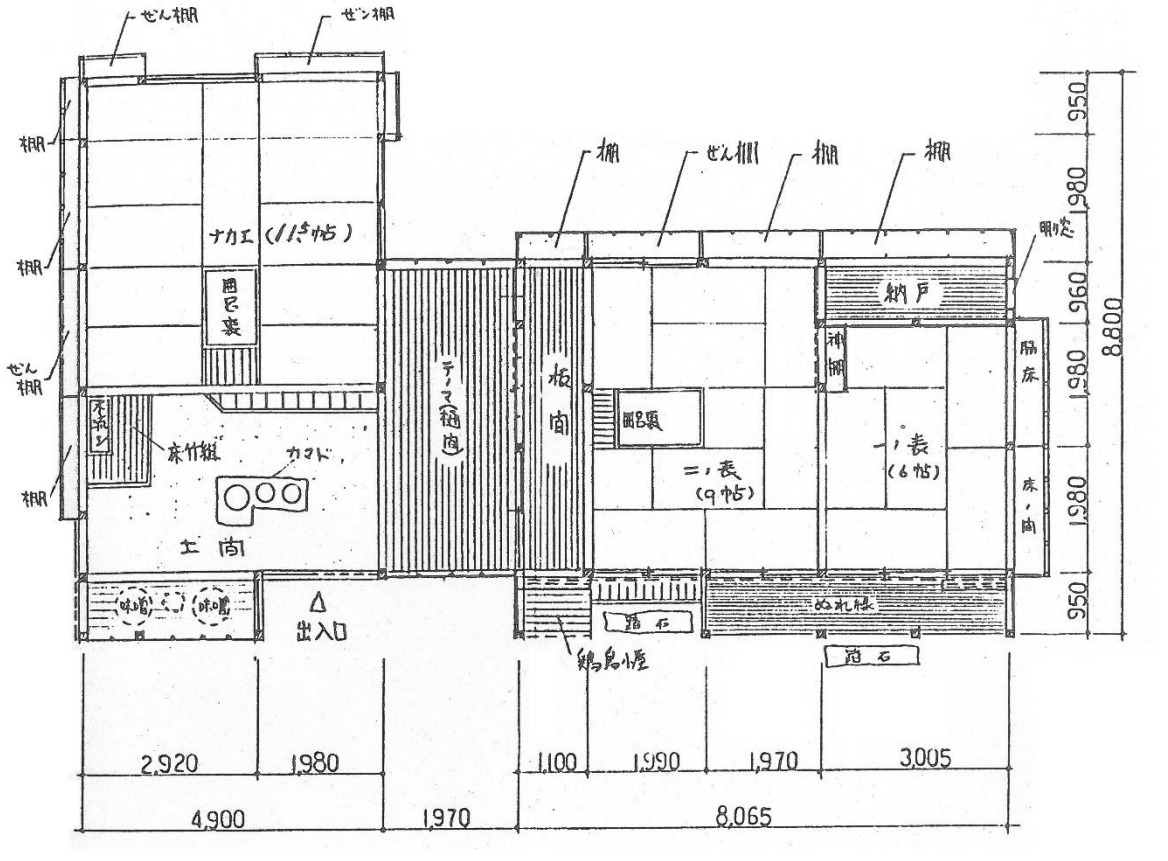
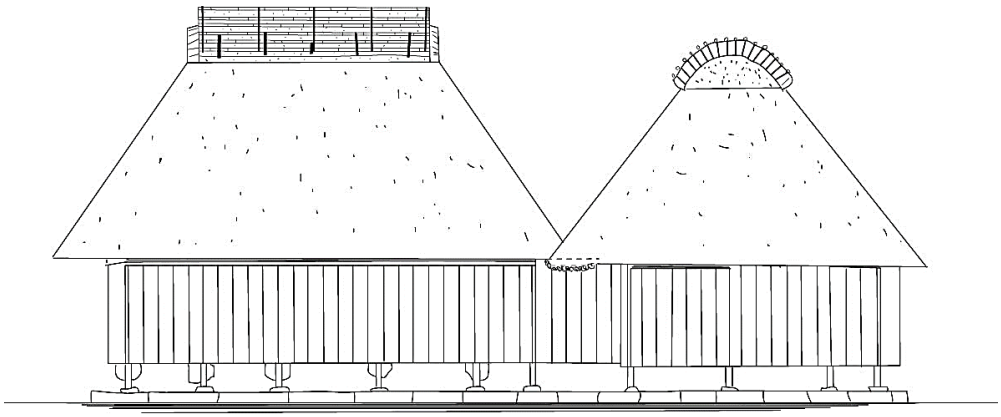


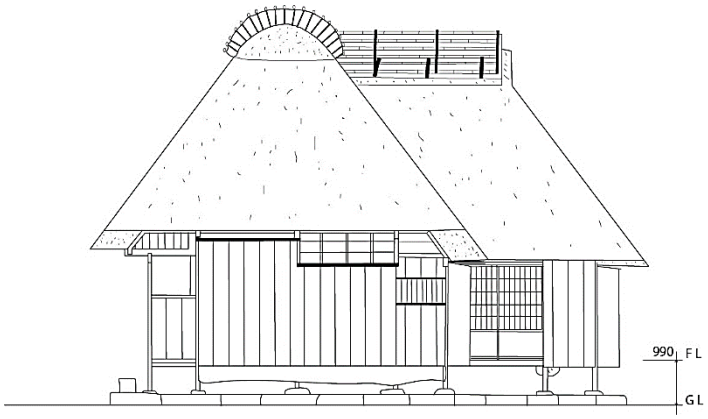
図４　立面図（復元）　（『記録』５，46，47，48，49 頁，一部改）

南側立面（移築後東側）

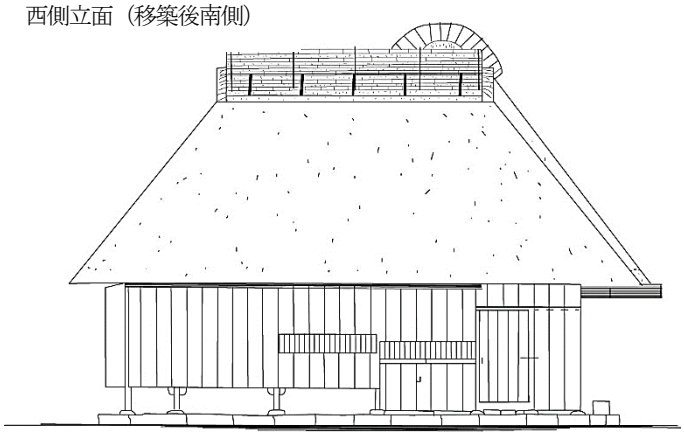
北側立面（移築後西側）



東側立面（移築後北側）



西側立面（移築後南側）



※　『記録』では，建物の方角表記を移築前の方角に合わせている。移築後の方角を（ ）内に補った。

（２）工事の概要

工事の名称は,「明治百年記念館新築工事外構その他工事」で，施主は鹿児島県，設計はＫＯＢ建築コンサルタント（株）が行った。

寄贈者の海老ヶ迫砂雄氏，大工の溝口年男氏の協力を得て，鹿島・小牧・新生建設共同企業体が工事を請負，仮設・地業を鹿建工業，基礎梁型枠を七呂組，解体復元工事を工藤工務店，古色仕上げを上原塗装が担当した。

工期は，昭和 57 年 10 月６日に着手し，昭和 58 年３月 20 日に完成した（工程表は，図５参照）。

２　事前調査

（１）破損調査

ア　基礎

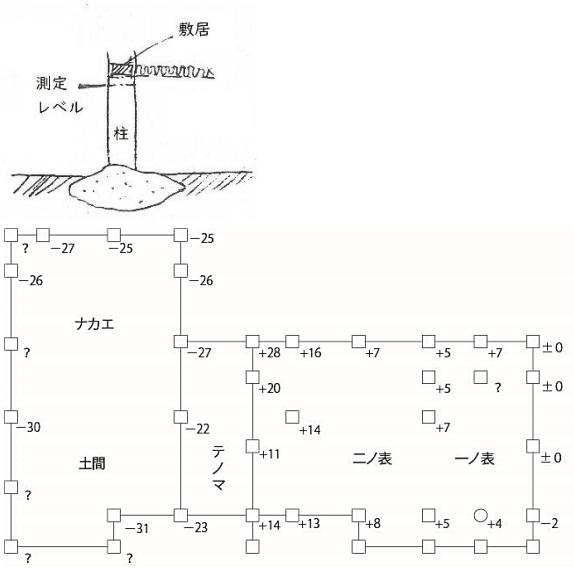
地盤は，約 250 ㎜の盛土により造成され，周囲には縁石を廻らして土砂の流失を防止している。

増築部や「なかえ」北側では，縁石が除去されていたため，盛土が流れ，礎石の土かぶりを少なくしていた。

イ　軸部

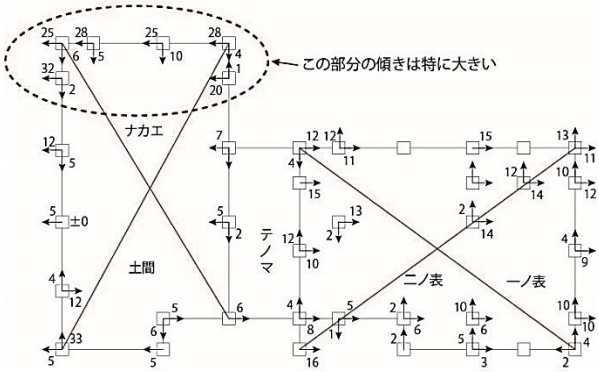
柱の不同沈下の状況は,一ノ表の床柱を基準（０）とし，各柱の敷居下端より 30 ㎜下に打ってある創建時の墨のレベルを測定した。

図６　柱の不同沈下　（『記録』10 頁，一部改）



柱の傾きは，敷居と梁の間（1,800㎜）で傾斜した量（Ｘ，Ｙ方向）を下げ振りで測定した。特に「なかえ」の北側で傾きが大きかった（図７）。

図７　柱の傾斜　（『記録』11 頁，一部改）



軸組はしっかりしており，概ね柱の不同沈下や傾きは少なかった。ただし，柱の足元が腐朽しているものが５本，ウドコ（大床）やエビキ（大引）が腐朽しているものが６本あり，これらはシロアリの被害[8]を受けていた（図８・９）。

図８　ウドコ・エビキの腐朽状況

（『記録』12 頁，一部改）

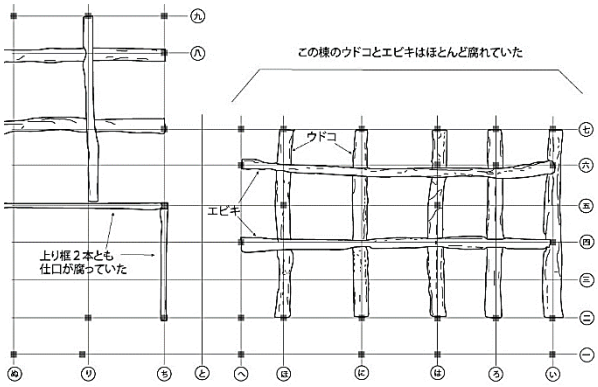
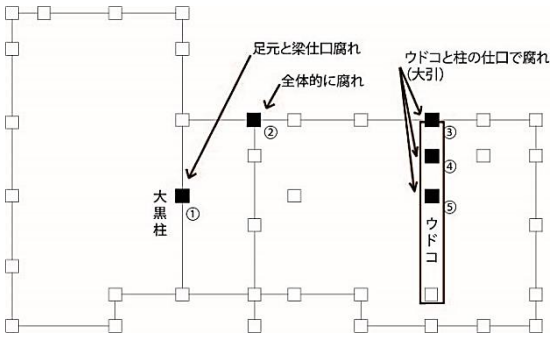
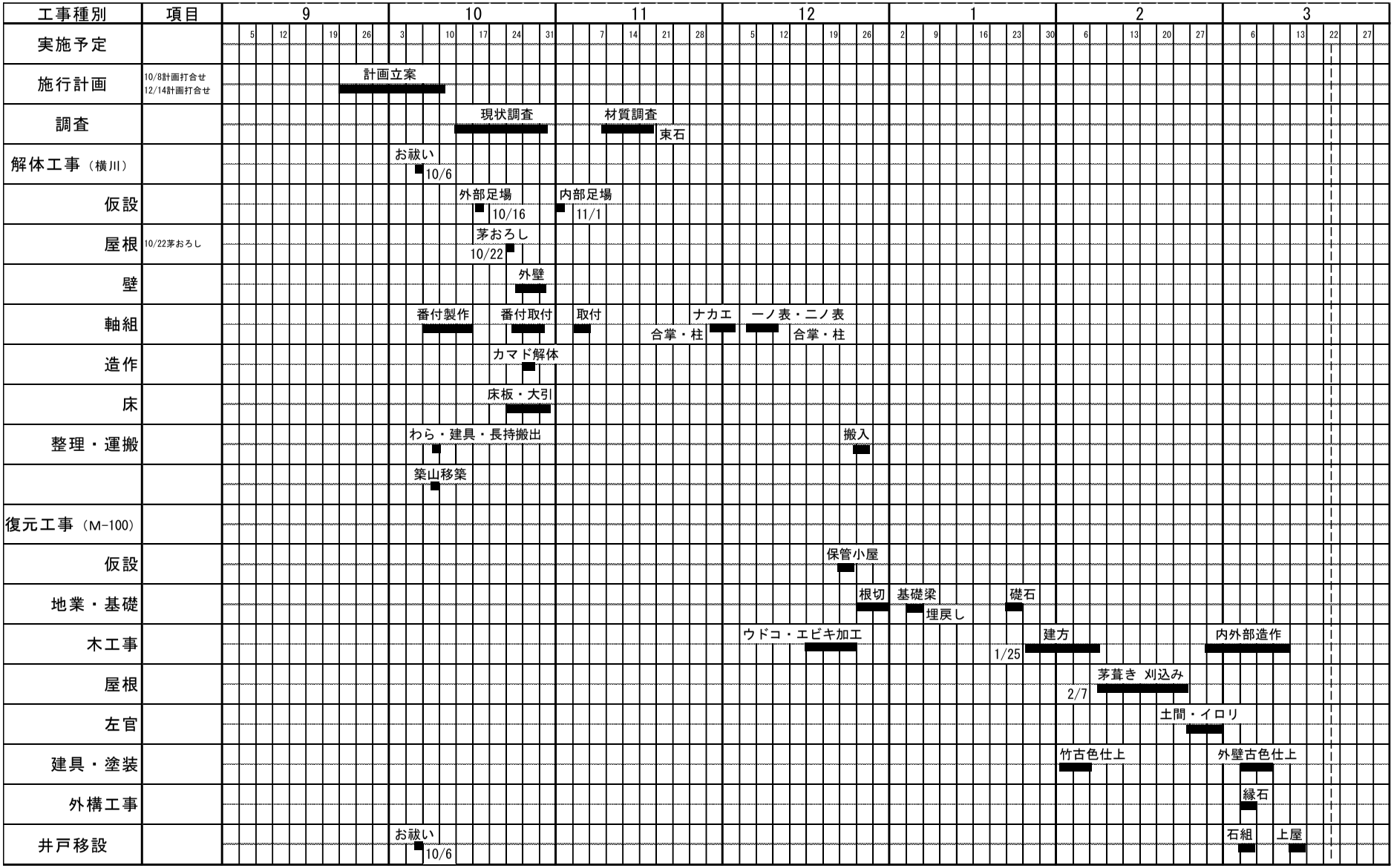


図９　柱の腐朽状況　（『記録』11 頁，一部改）



腐朽した柱のうち，図９中の①の柱（大黒柱）は，屋根からの漏水のため足元と梁仕口が腐れ，腐朽が激しくシロアリにも侵されていた。②の柱は，全面的に腐れ，増築部の取合の所からシロアリに侵されていた。③～⑤の柱は，ウドコ（大引）がシロアリにほとんど完全に侵されたため，仕口部もシロアリに食われた状況であった。

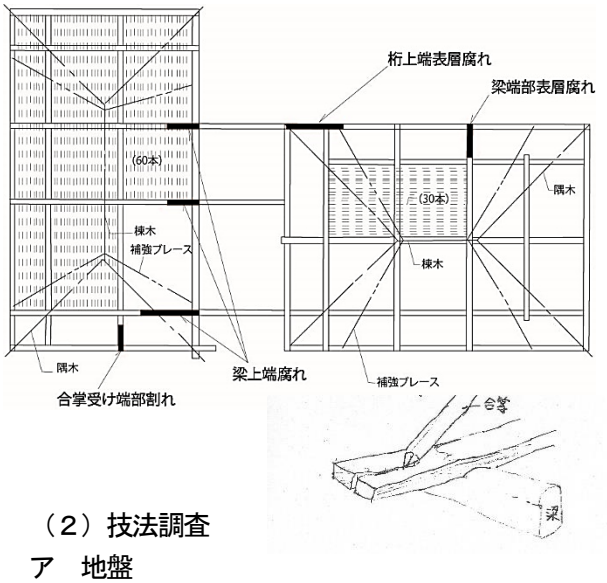
図５　工程表　（『記録』９頁，一部改）



ウ　梁・小屋組

茅屋根からの雨漏りにより，梁の端部を中心に腐朽が確認された（図 10）。

図 10　梁・小屋組の腐朽状況　（『記録』13 頁，一部改）



（2）技法調査

ア　地盤

建物地盤は，黒色の砂質土で，一段高く盛土造成してあった。

礎石は，主に花崗岩の山石（径 300～500 ㎜，厚さ 200～300 ㎜）を用い，いずれも野面石で，その据付は，突き固める単純な工法であった。柱礎石には，上端に柱芯墨が打ってあった。

イ　平面計画

柱間寸法（モデュール）を推定するために，①柱内内寸法，②敷居巾を調査した。

①柱内内寸法は，12 尺６寸（3,818㎜）で統一されており，各室の上り框・敷居等は，柱内面に揃えていた。

②敷居巾は，５寸に定められていた。

以上のことから，畳の長さ６尺３寸（1,909㎜）を基準として，柱間寸法を定めたと考えられ，各柱間の一間は，６尺５寸５分（1,985㎜）と推定される。

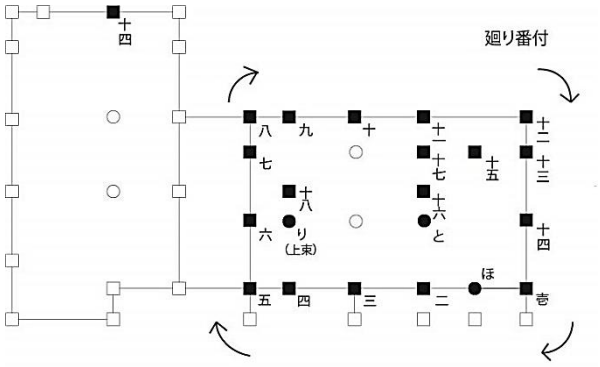
ウ　当初番付

当初の番付は，解体調査中に発見された柱仕口内や地貫に書かれた番付によって「おもて」棟は，ほぼ復元できたが，「なかえ」棟は，１箇所しか発見できなかった。

「おもて」棟の番付は，東南隅の柱を壱番として，南側柱を正面から右回りに打ち付けた「廻り番付」である。側柱の最終番付は，東側南より２本目の柱の十四番であるため，内部柱は，東側より十五～十八番としている。

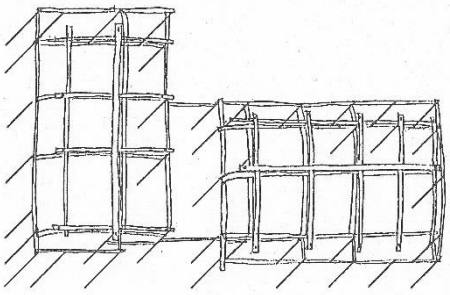
また，上束などは，「ほ」，「と」，「り」の番号を用いている（図 11）。

図 11　当初番付　（『記録』17 頁，一部改）



エ　架構図（図 12）

図 12　架構図　（『記録』17 頁）



オ　仕口（図 13～19）

図 13　ウドコと柱　（『記録』18 頁）

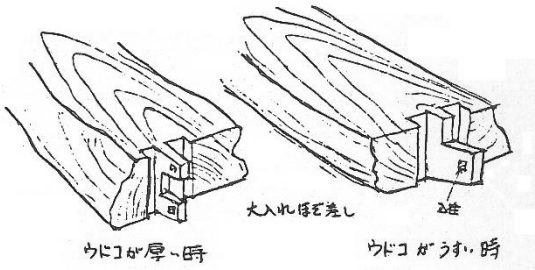


図 14　繋梁　（『記録』18 頁）

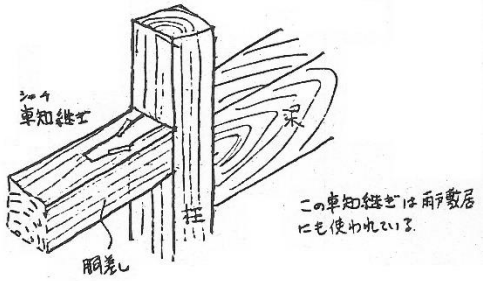


図 15　貫の継手　（『記録』18 頁）

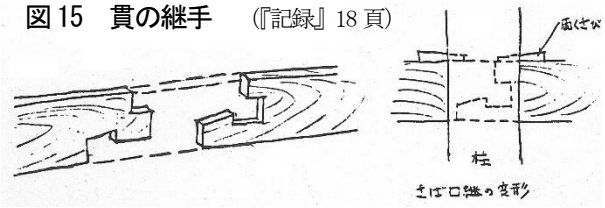


図16　柱とウドコ（中間）　（『記録』19 頁）

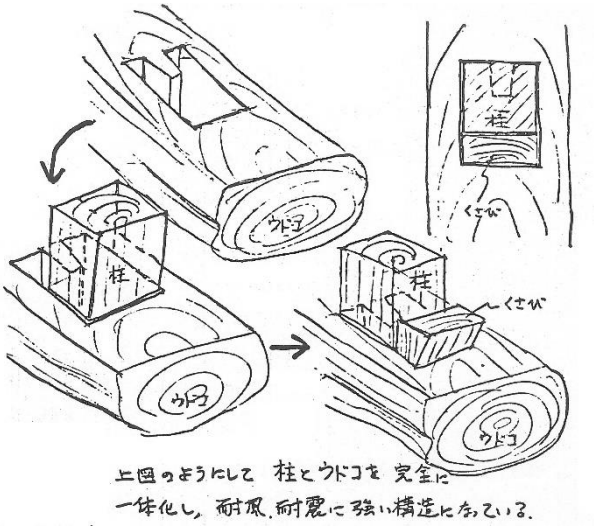


図17　柱，梁，桁の納り　（『記録』19 頁）

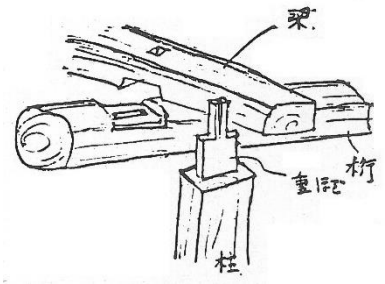


図18　棟木と又首　（『記録』20 頁）

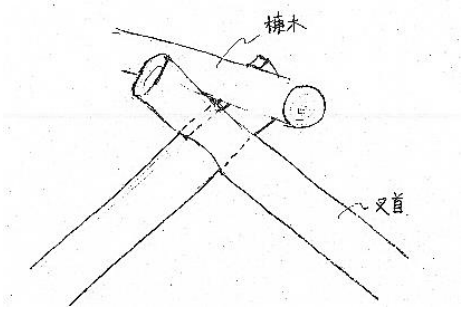
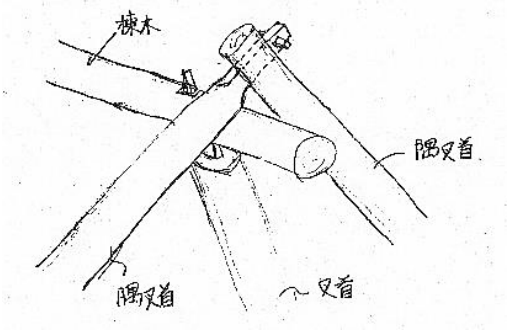


図19　棟木と隅又首　（『記録』20 頁）

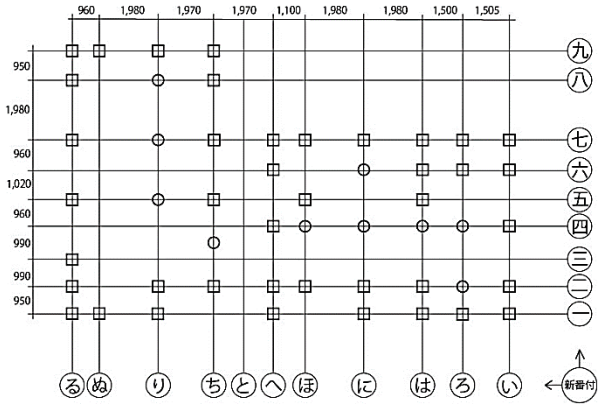


3　解体工事

（1）解体番付

解体に先立ち，各柱に新たな番付を付し，ベニヤ板の番付札（縦 60×横 100 ㎜）を用意した。

図20　解体番付　（『記録』21 頁，一部改）

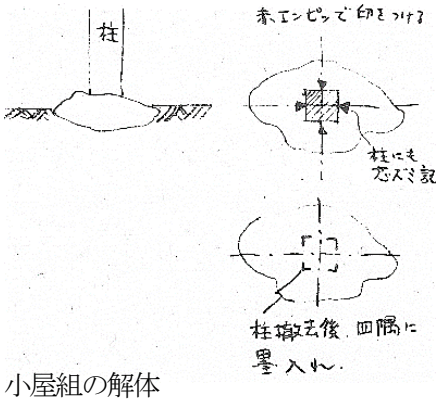


（2）解体方法

建物の解体に当たっては，次の順序で解体した。

① 解体足場の設置（住宅周囲に単管足場を組む）
② 屋根おろし
③ 床板・根太解体
④ 外壁解体
⑤ 礎石と柱の調査
　礎石と柱には，図 21 のように印を付けた。

図21　礎石と柱の墨入れ　（『記録』22 頁）



⑥ 小屋組の解体
⑦ 梁・柱の解体

（3）歩掛

作業名	作業員・人工	数量	歩掛
屋根おろし	横川町の人々7 人工	茅屋根 134 ㎡	19.1 ㎡/人
外壁解体	大工　5 人工	82.3 ㎡	16.5 ㎡/人
小屋組・梁・柱の解体	大工　13 人工	420 ㎡	32.3 ㎡/人

（4）発見資料

解体中，「てのま」及び「なかえ」の表土より，寛永通宝２枚，中国の銅銭３枚，銀製のかんざし１本が発見された。

4　復元工事

（1）取替材の加工

腐朽材の取替のため，横川町の山林より材木を切り出し，馬を使い運び出した。

①ウドコ４本（シイ）
②エビキ２本（シイ）
③梁１本（カシ）
④上框２本（イチイ）

切り出した新材は，海老ヶ迫家の敷地内にて墨出し，加工を行った。加工は，創建当時と同じように，斧で荒削りの上，手斧にて仕上げた。

（2）既設材のクリーニング

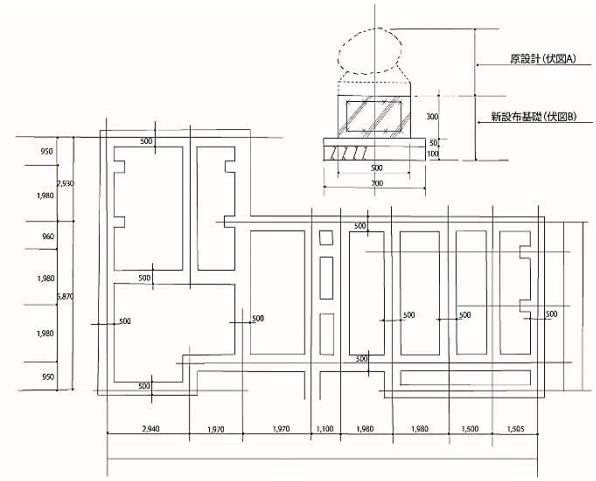
既設材（特に梁と柱）は，長年の使用で汚れやススがついているものが多かった。特に「なかえ」の梁の汚れが最も激しかった。

古色を失わずに汚れを除去する方法を検討し，ススはケレン棒で取り，縄で擦った後，左官用の刷毛を使用し水洗いした。木材のクリーニングは，海老ヶ迫家敷地内で行った。

（3）基礎工事

基礎は，整備・維持のため布基礎とし，かつ転圧を十分に行った。また，耐風・耐震のため，布基礎に38本のアンカーボルトを設けた（図22）。盛土には，横川町の土を使用した。

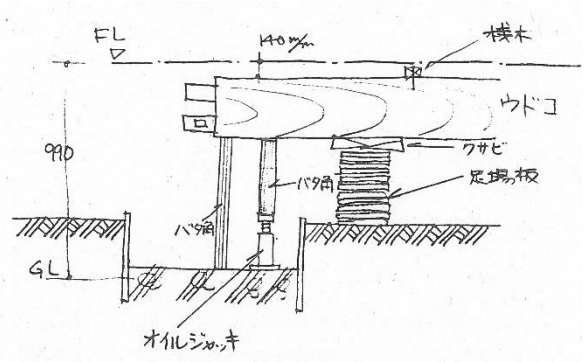
図22　布基礎　（「設計図面」，一部改）



（4）建方

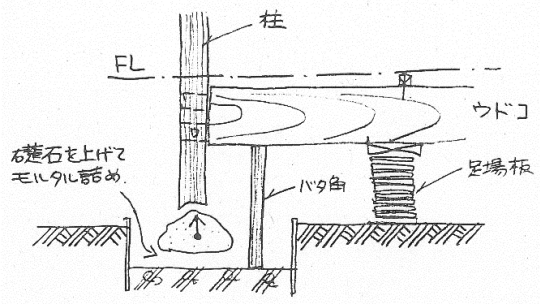
①　礎石・束石の配置
　５ｔクレーン車を使用
②　ウドコ固定用の足場板敷込
　ウドコの下端より30～50㎜下げて板を敷込む。
③　ウドコの仮置き
　遣方天端に水糸を張り，ウドコの天端をＦＬ-140に合わせるため，足場板の調整を行う。
④　ウドコ間隔調整
　ウドコの天端に桟木を打ち付けて，ウドコの間隔を調整する。
⑤　全てのウドコのレベル調整
　オイルジャッキを使用して二七通りの天端をＦＬ-140㎜に合わせる。

図23　ウドコの設置　（『記録』26頁）



⑥　ウドコの固定
　基準の高さに合わせたら，ウドコの下端にクサビを両方向より打ち込み，バタ角で支える。
　※　防腐・防蟻処理を実施
⑦　エビキの取付
　５ｔクレーン車を使用
⑧　柱の取り付け
　七通りより取り付け
⑨　桁・梁組立
　５ｔクレーン車使用。七，二，へ，ほ通り
　※　防腐・防蟻処理を実施
⑩　礎石の据え付け

図24　礎石の据え付け　（『記録』27頁）



⑪　ウドコ下の足場板取除き
⑫　合掌組立，棟木取付
　内部足場を組み，取付け

（5）茅葺き

① 屋中竹の取付

取り付け位置は，合掌のスミの跡に合わせ，既設と同じ位置に置く。間隔800㎜

② 垂木竹の取付

取付間隔300㎜

垂木竹は，棟木に掛かる箇所を鎌で切り込みを入れて曲げ，ずり落ちないようにする。

③ 化粧垂木揃えの取付

竹の継ぎ目は両木口に竹を差込み，垂木の周りに棕櫚縄を巻きつける。

化粧垂木を二寸板の上に釘止めにする。

④ 割竹の取付

割竹を（径80㎜を８つ割り）を，６㎜の縄でタル木に上から下に固定する。

⑤ 根付の製作

根付の長さは約2,600㎜（「なかえ」10個，「おもて」10個を製作）

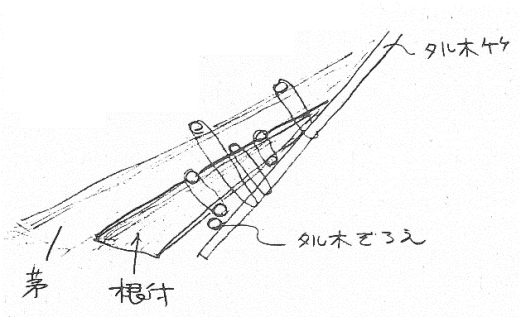
一つの根付につき４本のシモト竹を用意し，根付加工用の台の下にシモト竹を２本敷き，台の上に麦藁を厚さ400㎜，茅を厚さ100㎜積む。茅の上にシモト竹２本を乗せ，上下の竹を縄で締めて，片方の厚さが300㎜となるようにする。根付１つにつき10箇所を縄で固定する。両端が崩れないように上下の竹を縄で固定し，木で叩いて屋根ばさみで切り揃える。

⑥ 根付の取付

根付のシモト竹を垂木揃えの上に乗せ掛けて，縄を垂木竹に通して根元を締め付ける。

根付の継ぎ目部は，麦藁を入れる。

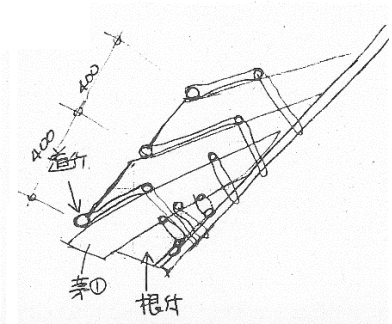
図25　根付の取付　（『記録』31頁）



⑦ 茅葺き

根付の上に茅を乗せて，シモト竹で垂木に固定し，シモト竹より道竹を吊す。そして，道竹の天端より茅を勾配に合わせて400㎜ほど積み上げ，シモト竹で締める。これを繰り返す。

図26　茅葺き　（『記録』31頁）



⑧ 棟葺き

平部分の最後の茅は，シモト竹より大きな垂木竹で押さえつける。そして，棟に向かって伸びた茅を中心に押し込む。このとき，中心部がくぼむため，茅を長手方向に入れてなだらかな曲線を作る。

棟の上に整備のためアスファルトルーフィング22 kgを長手方向に２枚重ね，その上に銅板（幅450㎜，重ね50㎜）を乗せ，銅線（＃18）で固定する。

⑨ 棟造り

(1) 妻側より茅を乗せて固定する。

(2) 径250㎜ほどの茅を縄で丸めて固定する。

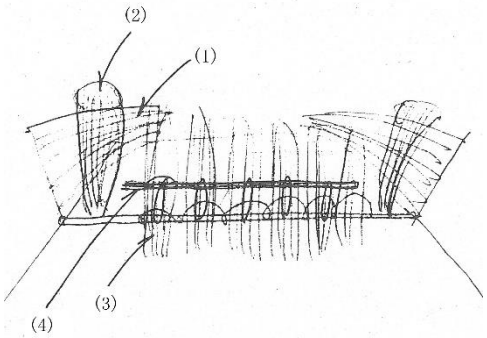
(3) 平部分の茅を径500㎜ほどに丸めて縄で竹に固定する。

(4) (3)の茅の上に，竹を敷いて縄と針金で固定する。

(5) (4)の竹の上に，径100㎜の茅を乗せて竹に固定する（ネコカヤ）。

(6) 上に伸びた茅を中心に曲げ込む。

図27　棟造り　（『記録』33頁，一部改）



(7) 棟のおさえ竹を乗せ，縄と銅線で固定する。

(8) ハナ部分に化粧の藁を竹のくしでとめる。

(9) 棟竹を切断して長さを調整する。

⑩ 茅刈込み

茅ばさみで刈込む。

（6）カマド・囲炉裏

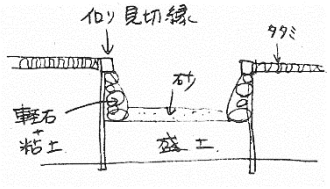
① カマド

軽石を加工し，周囲に軽石をおいて粘土をたたき付けて仕上げる。

② 囲炉裏

見切縁の下に軽石と粘土で壁を作る。

図28　囲炉裏　（『記録』35頁）

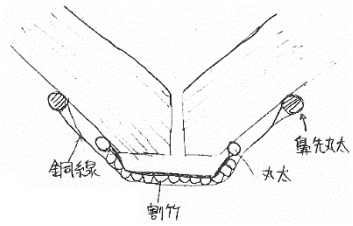


なお，カマドと囲炉裏の粘土は，カマゲの中に横川町の粘土とワラスサ（100㎜ にカット）を入れ，水を加えながら足で踏みつけて練ったものを使用する。

（7）谷樋工事

「てのま」の樋は，整備・維持のため ⌒ の形に加工した被覆鋼板（オリエンタルメタル）を銅線で丸太に固定し，丸竹の半割を被覆鋼板の下に沿うように並べ，これを銅線で鼻先丸太に結び固定する。銅線の上に棕櫚縄を用いて結束する。

図29　樋の固定　（『記録』36頁）



（8）古色仕上

① 竹

垂木竹等は，酢酸により熱湯脱色し，茶粉により着色。

② 外壁

キシラデコール（110オリーブ）を使用。

③ 内壁

阿仙薬＋重クロム酸＋キシラデコール（110 オリーブ）を使用。

（9）防腐・防蟻工事

防腐・防蟻には，キシラモン（タケダ薬品）を使用した。土台・屋根にはキシラモンＴＨ，内部柱・壁にはキシラモンＴＳＨ，外壁は古色仕上を兼ねてキシラデコール（前述），腐朽の激しい部分はキシラモンＴＨを使用する。

（10）人工

① 土台加工（ウドコ４本，エビキ２本）

手斧による仕上　大工30人日

② 建方（二棟）

大工15人日

③ 茅葺き

(1) 下地作り　30人日

(2) 茅葺き　79人日

(3) 刈込み　46人日

茅数量　約2,000束

以上が，旧海老ヶ迫家住宅の解体・移築・復元に係る工事報告書の要約である。

おわりに

旧海老ヶ迫家住宅の復元においては，既存の材を活用し，取り替えの必要な材料は，なるべく地元の横川町で調達した。また，解体時の調査や事前の聞き取りをもとに，地域に伝わる技法を採用し，創建当時の復元に努めたものである。

現在のところ，旧海老ヶ迫家住宅と同じ「樋の間二つ家」の形式をもつ民家で茅葺き屋根の構造を残すものは，肝属郡肝付町新富の二階堂家住宅，薩摩川内市入来町浦之名の旧増田家住宅，宮崎県諸県郡高原町蒲牟田（昭和49～50（1974～75）年に宮崎市内の宮崎県立総合博物館敷地内に移築復元）の旧黒木家住宅のみである。なお，旧海老ヶ迫家住宅を除いて，他は全て国指定重要文化財となっているが[9]，これらの住宅にはそれぞれ異なる特徴が見られる。

二階堂家住宅は，建築年代は「おもて」が文化７（1810）年頃，「なかえ」が明治22（1889）年頃のものと考えられている。「おもて」は広間形三間取りで，トコノマとオモテの南側に東西に長い縁側が配され，竹庇が掛かる。「てのま」の前後には棚がつくられている。「なかえ」が「おもて」よりも１間半北側に下げて建てられており，ウスニワが，「なかえ」の背面にある[10]。

旧黒木家住宅は，天保５～６（1834～35）年の建造で，田布施郷（現南さつま市金峰町）の大工によって建てられたものである。「おもて」は広間形三間取りで，「てのま」の「おもて」側境目に棚があり，棚と戸で「おもて」の境界を保っている[11]。

旧増田家住宅は，明治６（1873）年建造で，その後増築されているが，大正７～12（1918～23）年頃を整備年代として復元している。創建当初から「お

もて」は四間取りで，「なかえ」と「おもて」の間取りは，「てのま」を挟んでナカエとナンド・ウチザが向き合い，「おもて」背面の平と「なかえ」背面の妻が背中合わせに前後にずれることなく接続した特殊な間取りと形状をしている[12]。

旧海老ヶ迫家住宅は，「おもて」が広間形三間取りであるものの，ナンドは狭く居室というよりも収納のための空間と考えられ，二室並列に近い。上記住宅と比較すると「おもて」が一つの部屋から部屋数を増やしていく過程を見て取れる。また，「なかえ」よりも一段高い「おもて」の床高と柱高を考慮し，「おもて」の大屋根の軒先の高さを「なかえ」の軒先の高さに揃えるために「おもて」の「てのま」側に板間の廊下を配している。これは，この地域の「樋の間二つ家」に見られる特徴と考えられる[13]。「てのま」部分の「おもて」と「なかえ」の側柱間の距離も上記住宅に比べて長く，「おもて」と「なかえ」の独立性が高いといえる。

さて，「樋の間二つ家」に限らず，鹿児島県内の二棟造りの民家は，生活様式の変化や維持管理の難しさから，ほぼ姿を消してしまった。指定文化財，あるいは国の伝統的建造物群保存地区に選定された地区の建造物，博物館施設内にあるものがほとんどである。かろうじて創建時の床組や軸組を残してトタンや瓦に葺き替えられたもの，現代の生活様式に併せて大規模な改築を行ったものも農村部には点在するが，現存数は少ない。現在，少子高齢化により農村部の人口は大きく減っており，今後，これらの古民家の継承は，かなり厳しい状況が予想される。旧海老ヶ迫家住宅をはじめ，現存する古民家の存在価値は，非常に高まっているといえよう。

黎明館では，旧海老ヶ迫家住宅の維持・管理のために，開館当初から囲炉裏で火を焚く燻蒸を継続的に行っており，燻蒸の様子を外から見学できるようにしている。また，民具や正月飾りなどの民俗展示も行い，一般の方をはじめ，社会科見学や修学旅行で来館した小・中学生に旧海老ヶ迫家住宅を紹介し，昔の暮らしや住まいについて解説している。今後も旧海老ヶ迫家住宅を活用した体験学習を企画するなど，古民家の有する民俗学的，建築学的な価値を踏まえた上で，保存整備と活用に努める必要がある[14]。

註

（1）おもて・なかえ・てのまは，建物の名称には一重括弧（「」）を用い，建物の部屋名には片仮名を用いて区別した。

（2）小野重朗『南九州民家図帖―南九州の民家の系譜―』（私家版，1963 年），同『九州の民家―有形文化の系譜（上）―』（慶友社，1982 年）

（3）『鹿児島県の民家―鹿児島県緊急民家調査報告書―』（鹿児島県教育委員会，1975 年）35 頁の第 23 図を参考に作成した。

（4）『てのま型二つ家移築の記録』（鹿島・小牧・新生建設共同企業体，1983 年 4 月，黎明館保管）

報告書の作成者は，鹿島・小牧・新生建設共同企業体所長立川義信，主任藤田英二，主任松ヶ野一弘，主任岩本昇，鹿島建設技術研究所主任研究員安孫子昭久，鹿島建設九州支店技術課福山宏一

（5）図版は，前掲注４に掲載されたものを転載し，一部トレースしたものを掲載した。

（6）海老ヶ迫家には，宝暦８（1758）年の横川下之村海老ヶ迫門名寄帳や明治期の地券など 45 点の古文書が伝わっており，これらは，昭和 57（1982）年に黎明館に寄贈された。

（7）前掲注３

（8）シロアリの被害は，ヤマトシロアリとイエシロアリの両者の被害の跡が見られた。また，増築部には，ヒラタキクイムシによる被害も確認された。

（9）「旧黒木家住宅」（昭和 48 年 2 月 23 日指定），「二階堂家住宅　おもて　なかえ」（昭和 50 年 6 月 23 日指定），「旧増田家住宅四棟　おもて　なかえ　石蔵　浴室便所　附石敢當」（平成 26 年 12 月 10 日指定）

(10) 文化財建造物保存技術協会編『重要文化財二階堂家住宅保存修理工事報告書』（二階堂進，1987 年）

(11)『宮崎県の民家―民家緊急調査報告書―』（宮崎県教育委員会，1973 年），文化財建造物保存技術協会編『重要文化財黒木家住宅保存修理工事報告書』（宮崎県，1975 年）

(12) 文化財保存計画協会編『薩摩川内市指定文化財　旧増田家住宅保存修理工事報告書』（薩摩川内市，2013 年）

(13) 前掲注３所載の原口家住宅（旧姶良郡横川町上ノ）も同様に「おもて」の「てのま」側に廊下を配している。

(14) 旧海老ヶ迫家住宅は，桜島の降灰と台風被害により昭和 63 年に屋根を一部補修，平成３年と平成 23 年に葺き替えを行っている。

写真１　解体前　「なかえ」外観　南西側

写真２　解体前　「なかえ」外観　北西側

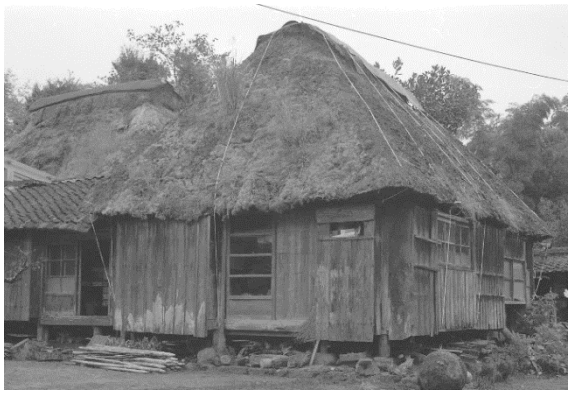


写真３　解体前　「おもて」外観　南東側

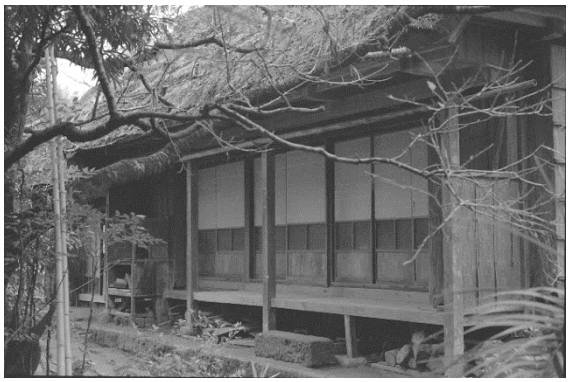


写真４　解体前　「おもて」外観　東側

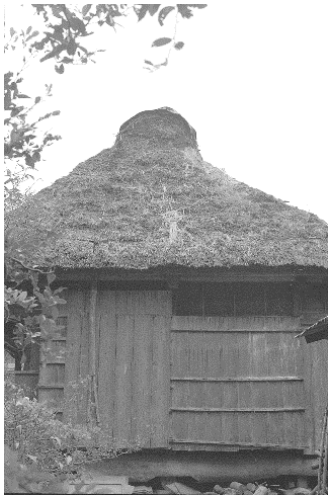


写真５　解体工事　茅おろし

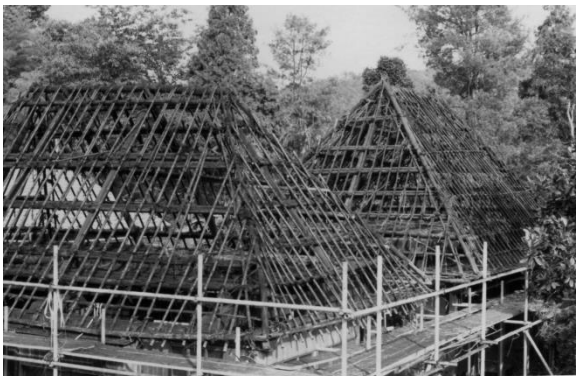


写真６　解体工事　旧番付「十三」番

写真７　解体工事　礎石の状況

写真８　柱取合仕口の取替材加工

写真９　「おもて」建方　桁・梁組立

写真 10　「なかえ」建方　大黒柱と上框の仕口

写真 11　「なかえ」茅葺き　根付の取付

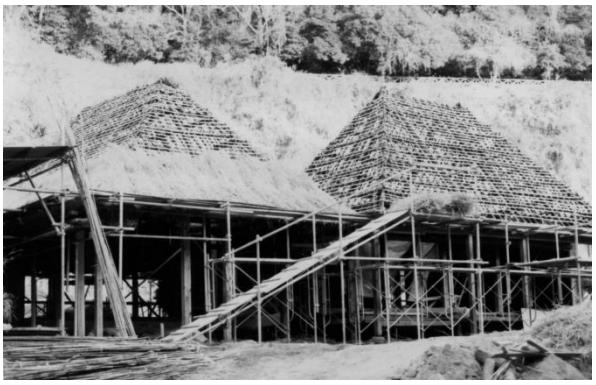


写真 12　「なかえ」棟造り　おさえ竹の固定

写真 13　棟上げの様子（「おもて」の上部）

写真 14　竣工　竹樋

写真 15　竣工　左「おもて」，右「なかえ」

写真 16　竣工　左「なかえ」，右「おもて」

（おの　きょういち　本館学芸課主査）